

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720108

研究課題名(和文) 近世琉球期・先島地方旧記類の研究基盤形成を目標とした総合的研究

研究課題名(英文) Basic Foundational Research on the Ryukyuan Early Modern Period's Sakishima Area Chihou Kyuki

研究代表者

木村 淳也 (KIMURA, Junya)

明治大学・研究・知財戦略機構・共同研究員

研究者番号：40614772

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、従来の日本文学、および琉球研究において、サブテキスト的な取り扱いを受ける先島地方の「地方旧記類」を対象として、本文確定を目指した基礎的な研究基盤の形成と、テキストとしての性格究明を行った。その成果として、地方旧記類の本文テキストデータベースを作成し、これをWEB上で一般公開した。

またこれら地方旧記類が作成された地域において、説話伝承がどのような認識のもとに形成され描かれるのか、さらに、これらを基に作成された王権の史書や説話、地誌との比較を通して、どのような点で差異があるのか、などについても考察し、これらを論文・研究会発表などで適宜公開した。

研究成果の概要(英文)：The object of this research is the topographical atlas of the Ryukyuan Sakishima area that is the Chihou-Kyuki. In the vast majority of research on the Ryukyus, this work has been relegated to the status of supplementary reader, and the studies that do take it as a major focus are quite scarce. In light of this situation, as the groundwork for future studies, a transcription of the main text of the Chihou-Kyuki was created, and made available publicly online.

Also, a comparison with other topographical atlases created by the Ryukyu Kingdom was made based on knowledge gained in the creation of said text database. The differences between these texts have been presented by the current author in a paper, and in the form of a research report.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学

キーワード：日本文学一般 琉球文学 近世琉球 地方旧記 宮古・八重山地方 説話文学 地誌

1. 研究開始当初の背景

(1) 既存の琉球文学研究は、『おもろさうし』などの歌謡集や、祭祀の場で生起する「神歌」などの研究に傾斜しており、歴史書や説話集、地誌などのテキストに対しては、文学的考察が全く加えられていなかった。そもそも琉球文学自体が、日本文学研究におけるサブテキスト的な扱いを受けており、自立的な研究分野として発展段階にある。

(2) 筆者は、琉球最後の史書『球陽』の外巻である説話集『遺老説伝』に関して、文献学的研究を主として行ってきた。その際に問題となったのが、この『遺老説伝』へと説話が収載される過程をみたとき、「地方旧記」「琉球国由来記」「琉球国旧記」「球陽」・『遺老説伝』というような段階的な依拠があった点である。琉球国由来記や琉球国旧記といった中央編纂の地誌に対する研究は、現在までに何編か出来されているが、これらの根本資料である離島で編纂された「地方旧記類」と呼ばれるテキスト群に関しては、久米島の旧記類を対象とした一連の成果を除いては、翻刻などの一応の成果が存在しているものの、研究が最も立ち後れているという背景があった。

2. 研究の目的

上述したように、王府が地方間切に対し断続的に提出を求めた「地方旧記」類に関しても、王府の地誌類との厳密な比較研究や、これらのテキストの編纂、成立、本文の意味など、地方旧記のテキストそれ自体の意味を問うような研究が必要である。それは、より綿密、かつ厳密な琉球文学に対する研究を遂行するうえでも重要な意味をもつといえる。琉球文学を「日本」対「琉球」、すなわち中心/周縁の視点で考えていた従来の研究態度から脱却し、琉球における中心/周縁という、より細密な視点でこれらを捉え直し、琉球の周縁地域におけるテキストの編集方針や、その地域の祭祀の場で生起する口承伝承と、テキストに封入された伝承との相克を考える研究が、今後の琉球文学に必要であると思われる。上記事由から、そのための研究基盤の形成が喫緊の課題と考え、これを研究目的とした。

3. 研究の方法

地方旧記類は地域的に大別すると、宮古島系旧記類、八重山島系旧記類、沖縄群島旧記類の三類とすることが出来る。またこれらの三類は、王府に提出された年代で共時的な一群を形成しており、康熙年間、雍正年間、乾隆年間に三分することができる。しかし、研究期間内で目的を遂行するためには範疇が膨大であるため、その対象を、残存資料が多いものの研究があまり進んでいない宮古島・八重山島の旧記類に限定し、以下の3つの分野に細分して行うこととした。

- (A) 資料調査、本文の異同確認、および諸本の校合による校訂本文の作成、およびテキストデータ化
- (B) 本文注釈、文献研究
- (C) ならびに遺跡・祭祀のフィールド調査

また、(A)～(C)は下記のように細分し、並行的かつ組み合わせながら行うことによって、作業効率を上げることとした。

- (A)
- (A1) 翻刻・影印資料の他、現存資料の実見調査と分析を行い、本文の系統整理と分類。
- (A2) それらを基にした校訂本文・ならびにテキストデータの作成。

- (B)
- (B1) 王府の地誌類である『琉球国由来記』や『琉球国旧記』、『球陽』などとの比較を主とした文献研究。
- (B2) 各地域に時代を異にして成立した旧記類の比較から、それぞれの旧記の独自性を探る。

- (C) 地方旧記類等に記される説話伝承の舞台となった遺跡の実地踏査、並びに地域の説話解釈に繋がる独自性をもった祭祀の調査。

4. 研究成果

<2012年度>

(1) 地方旧記類の本文は、小島瓊禮校注『神道大系 神社編五十二 沖縄』(神道大系編纂会 1982年)ですでに翻刻されているが、宮古島旧記類に限って言えば、『平良史市』資料編に翻刻された本文と比べると随所に大きな校異がある。また、それぞれのテキストの対校に使われた諸本の系統的な整理・位置付けもなされていない。そういった意味から、まずこれらの本文の系統の綿密な分析、並びに本文校訂が行われなければならないと考えた。そのため、『御嶽由来記』『雍正旧記』『宮古島記事』の3件を取り上げ、翻刻・影印本文の確認と並行し、現地における資料実見を通して比較作業を行い系統判別と整理・分析とを行った。とくにこの作業における大きな成果は、所在不明となっていた最善写本を、宮古島市総合博物館にて所在確認できた点であろう。当該書蔵館許可のもと写本の写真版を入手し、これをテキストデータに反映する作業をおこなった。あわせて琉球大学附属図書館、沖縄県立博物館、沖縄県立図書館の所蔵する宮古島旧記関連資料の悉皆的な閲覧・調査も行った。上記の作業によって、まだ見直しの余地が多分に存在しているものの、テキストデータベースを作成し、これを所属研究所のホームページにて公開した。

- (2) 地方旧記類は、その土地に根を下ろし

た説話伝承や歴史叙述を有しており、地域研究のための第一級史料であると言える。地域の保持する独自資料をその地域で活性化させる意味でも、これらに丁寧な注釈を施し、還元する必要がある。研究計画においては、また明治大学・居駒永幸教授、宮古伝承文化研究センター所長・佐渡山安公氏に協力を仰ぎながら、慶世村公任『宮古史伝』、稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』などの先行研究を土台に、古語や方言など、言語学的研究の成果も踏まえた注釈を行う研究会を組織する予定であった。しかし、研究期間の短さから継続的な研究会の組織までには至らなかったが、筆者が客員研究員として所属する古代学研究所と、宮古島の神と森を考える会・宮古伝承文化研究センターとが共催して、シンポジウム『宮古島の神とシャーマン』を、2012年10月に開催することができた。直接の研究費目は異なっているが、このシンポジウムには計画段階から参画しており、当日は運営主任および司会を担当した。このような研究会の開催は、研究の一般還元という意味では大きな成果と言える。

(3) また地方旧記類は王府への復命項目として、地名起源や祭祀の由来を多く掲げる。これらに記された遺称地・遺跡の調査を行うことで、文献学的研究などに一層の正確さを与えることになる。また、これらの祭祀と、旧記類で文字化された祭祀とのディテール比較から、宮古島旧記類に反映される社会的・宗教的意識の解明が期待される。そのような意識のもと、2012年度は「夏ブー」とよばれる祭祀の調査を行った。この祭祀は長年中止されていたが、宮古島・狩俣集落の祭祀群の実質的な統率者である「アブンマ」の久しぶりの誕生により復活したものである。司祭の不在は、その他の祭祀にも影響を及ぼすものであったため、このアブンマの誕生により、他の祭祀の復活も期待され、また今後、地方旧記のテキスト上に記載された祭祀との比較が促される。一方で祭祀の生まれる(再生される)瞬間を目の当たりにすることは、殆ど経験できないほどの希有な出来事である。このような瞬間に立ち会えたことは、祭祀誕生の由来譚を語る説話の解釈において、大きな意味をもたらすであろう。

<2013年度>

(1) 2012年度に引き続き、八重山地域の旧記類を対象とした研究を行った。これらの旧記類も、未だ厳密な諸本調査が行われておらず、例えば『八重山嶽々由来記』などは複数の本文が存在するが、諸本の系統分析などは未だに行われていない。また『八重山島諸記帳』は『八重山島旧記』という異名もあるが、『八重山島旧記』という名称は全く異なった本文を持つ別系資料の名称としても用いられており、研究者間でも混乱が生じている。そうした理由もあってか、上記の二書を対象

とした研究は皆無といってよい。これらに關しても、前年度の研究手法と同様に、まず資料調査・校訂を行い、本文の正確な様相を明らかにした。当該研究に於いては、王府関連テキスト(琉球国由来記、球陽、遺老説伝等)に引用が散見される『八重山嶽々由来記』、『八重山嶋諸記帳』の2件に絞った調査をおこなった。2013年8月に石垣市立八重山博物館を訪問したが、その際、八重山旧記類は基本的に個人蔵本が多数を占めることがわかったため、当初の方針を切り替え、沖縄県立図書館が所蔵する八重山博物館資料影印の悉皆調査を行うに至った。この調査結果をもとに、版本としてすでに刊行されている諸本(神道大系所収本文、雑誌『南島』所収本文、および『八重山文化論集』所収本文)を中心的な対校本文としながら、基礎的なテキストデータベースを作成した。しかし、一部に書名・表題の不一致などの問題が残るため、今後の継続調査課題としたい。

(2) 計画当初段階では、八重山地域の祭祀調査、ならびに遺跡・聖所の調査を行い、これを解釈作業へと反映させることで、テキストとして記された伝承の深層の解明を試みるつもりであった。しかし、祭祀に関しては天候不順、日程調整の不備等からこれを果たすことができなかった。一方、八重山嶽々由来記に記された主な遺跡に関しては、これを悉皆調査することが出来た。現地調査におけるフィールドの確認は、説話の背負う視覚的・地理的感覚を補うものであり、物語が立ち上がる背景を理解する上では欠かせない作業である。この調査によって、説話の解釈が促進されたといえる。

(3) これらの地方旧記類は、『琉球国由来記』など、中央編纂のテキストを作成するために琉球王府から命を受け作り上げられたものと考えられる。よって、中央の文献との比較を通して考察することで、王府の地方記事編纂に関する意図と意識とを明らかにできるといえる。また一方で、時代ごとに内容を異にする同地域の地方旧記類が複数作成されている。これらの本文を、通時的な視点で比較することによって、その時代ごとの王府の先島地域に対する情報収集の意識とその変化が見えるといえよう。そういった観点から、王府編纂のテキスト類との比較や、先島旧記類同士の比較を組み合わせながら、先島旧記類に対する総合的なテキスト研究を行った。具体的には、例えば『遺老説伝』の掲載する説話群とその配列意識が、近世琉球期における国家の領域意識、ならびに先島地方の支配体制と密接に関係していることを、地方旧記の記述のあり方から考えた(発表)。また、宮古島の誕生儀礼に関する記述を『雍正旧記』から取り上げ、中国の竈神の伝承や、韓国の王権神話との比較を試みた(主要論文)。さらに、琉球国由来記にお

ける先島地方の御嶽の神が弁財天へ置換されるという現象は、王府よって行われたテキスト改竄の結果としてあるのではなく、地元主導のもと地方旧記作成の段階で行われていたことが指摘できた（主要論文）。これらの研究成果は適宜論文化し、また積極的な公開報告を行うかたちで社会に還元できたと思われる。

（４）これらの研究期間を通して、琉球関連テキストの研究会を模索してきた。前述の通り、地方旧記類に対する専一的な注釈作業を中心とした研究会の組織化は果たせなかったが、筆者の研究に一定の理解を示して頂いた立教大学・鈴木彰教授と協議しながら、薩摩・琉球本島・琉球離島の関係性と、説話生成の背景に着目した新しい研究会の運営を企画している。これも、本研究執行により生まれた一つの成果と言える。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

木村淳也、『三国遺事』と琉球の伝承世界、アジア遊学（『三国遺事』新たなる地平）、勉誠出版、査読なし、169号、2013年、117-131

木村淳也、琉球の守護神・航海神としての「弁財天」—その重層と変奏を薩琉関係からよむ—、立教大学日本学研究所年報、立教大学日本学研究所、査読なし、未定、2014年、未定

木村淳也、「遺老伝」の行方—『遺老説伝』所載の「銘苺子」、「無漏溪」伝承を考える—、説話文学研究、説話文学会、査読あり、47号、2012年、75-86

〔学会発表〕(計 4 件)

木村淳也、『三国遺事』と琉球の伝承世界、東アジアと韓国の文化交流、2014年02月～2014年02月18日、Hongbang University(ベトナム・ホーチミン)

木村淳也、重層し変奏する琉球の航海神—東アジア世界との関わりから—、立教大学日本学研究所2014年1月例会・シンポジウム、2014年01月31日～2014年01月31日、立教大学(東京都)

木村淳也、箕隅御嶽の由来譚を読む—旅の儀礼と伝承の創作—、日韓共同セミナー「朝鮮通信使と琉球使節団の比較研究」、2013年12月21日～2013年12月21日、静岡大学(静岡県)

木村淳也、『遺老説伝』の説話構成にみる近世琉球の領域意識、第3回高麗大学校・明治大学国際学術会議「韓・日文学歴史学の諸問題」、2012年09月14日～2012年09月14日、高麗大学校(韓国・ソウル)

〔図書〕(計 2 件)

島村幸一 木村淳也 他、勉誠出版、琉球交叉する歴史と文化、2014、456

増尾伸一郎 木村淳也 他、明治書院、交響する東方の知(知のユーラシア5) 2014、296

〔その他〕

ホームページ等

http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/bj_ryukyu2.html

6．研究組織

(1)研究代表者

木村 淳也 (KIMURA, Junya)

明治大学・研究・知財戦略機構・客員研究員

研究者番号：40614772